

中途視覚障害者の余暇時間

— 生活時間調査の結果から —

○ 渡辺文治 古畑英雄 市川文昭

(神奈川県総合リハビリテーションセンター・七沢ライトホーム)

中途視覚障害者 生活時間 余暇
はじめに

現在の社会の中で心身障害者が生活していくためには多くの困難・制約がある。障害者とひとくちと言っても障害の種類や程度はさまざまで、その置かれた状況も大きく異なっている。一般に障害者というと肢体不自由などを思い浮かべることが多いのだが視覚障害や聴覚障害といった感覚障害を持つ者も多い。ここではこの中の視覚障害者について考えていきたい。

視覚障害者という和普通「盲」あるいは「盲人」という語を連想し、全盲すなわち全く見えない人のことだと考えがちである。しかし、実際には何らかの視覚を有している者が多く、障害の内容は実に多様であり、その置かれた状況もそれぞれ異なっている。

さて、この視覚障害者の問題といえばこれまでは主に教育——盲児や弱視児の統合教育や教材の開発・大学受験、労働——理療(あんま・はり・きゅう)以外の職域の開拓、そして感覚代行機器の開発とその訓練方法などといったことを中心に考えられてきたように思われる。しかし、視覚に障害を持つということは、単に教育や労働といった面のみ困難・制約を生ずるわけではなく日常生活全般に渡ってその影響が及ぶことになる筈である。たとえば、在宅の障害者などには極めて単調な生活を送っている場合がみられる。そこで視覚障害者の実態を知ろうとして調べてみてもその生活等に関する調査はほとんどない。身体障害者に関しては日本レクリエーション協会が行なった実態調査報告書「在宅身体障害者のレクリエーションの現状」などがあり、外出が少ないことや介助・余暇についての問題が指摘されている。

そこで我々は七沢ライトホームで基本的な生活訓練(歩行・コミュニケーション・日常生活・感覚等)を受けた中途視覚障害者を対象とし、生活時間を調べてみることにした。

調査の概要

- 調査日 —— 1985年7月16日(火曜日)
- 調査方法 —— 電話による質問形式(点字が読めない、あるいは必要としない視覚障害者が多いので点字による質問用紙という形式とはならなかった。)
- 質問項目 —— 年齢、性別、職業、調査日の0時から24時までに行なわれた時刻別生活行動(1単位15分)、最近1週間の外出回数とその内容、最近1年間の旅行(1泊2日以上で仕事によるものは除く)回数とその内容について、
- 対象者 —— 七沢ライトホーム退所者で神奈川県内に住民票のあるものの中からアトラダムに100名を選んだ。
- 有効調査数 —— 68名(平均年齢44.9歳)。その内わけは勤務しているもの14名(20.6%)、学生16名(23.5%)、自宅自営11名(16.2%)、在宅者27名(39.7%)である。
- 調査結果のまとめ方 —— 生活行動は表1にまとめた項

表1 行動分類

大分類	中分類	具体例
すいみん		連続30分以上
食	専	
身のまわりの用事		洗顔、化粧、入浴、美容院、理髪、自分のふとん敷き
仕事	専	仕事(準備、あと片づけ、……) アルバイト、内職
学	業	授業・学校の行事 校内掃部、運動会、遠足、ホームルーム
	課外活動	放課後のクラブ活動
	学校外の学習	予・復習、学習塾
家	専	炊事 台所仕事、食事のしたく、あと片づけ
	そうじ	ゴミすて、たき火、水まき、草とり
	洗たく	洗たく、アイロンかけ、しみ抜き
	縫い物・編み物	ミシン、毛糸あみ
	実用品の買い物	家事としての日用品の買い物
	子どもの世話	授乳、幼児の相手、子ども(幼児・児童)のつきそい
交	家庭雑事	日曜大工、家具の手入れ、役所へ行く、手紙、家計簿
	個人約つき合い	知人との話し合い、待ち合わせ、訪問、酒、デート
休	社会的つき合い	義理・義務のつきあい、会合、宗教活動、デモ、PTA
	くつろぎ・休息	家族との会話、おやつ、うたたね、一人酒、一人で喫茶店
レジャー活動	病気・静養	入院、自宅療養、健康診断
	見物・鑑賞	映画、芸術、演芸、展示物、スポーツ、催物、音楽等の見物鑑賞
	スポーツ	スポーツをする
	勝負ごと	パチンコ、マージャン、トランプ、将棋、競輪・競馬
	行楽・散策	散歩、町をぶらつく、ハイキング、ドライブ、遊園地
	けいこごと・趣味	お茶、お花、おけいこごと、薙いじり、ペットの世話
移動	技能・資格の勉強	運転免許、タイフ、英会話、和歌などの勉強
	子どもの遊び	レーシングカー、ままごと、怪獣ごっこ……
新聞・雑誌・本	通	自宅と仕事場との行き帰り(極端な寄り道は、独立した行動とみなす)
	通	学校への行き帰り
	その他	通勤・通学以外の移動で他の行動に優先させるもの
ラジオ	新聞	日刊紙
	雑誌・本	週刊誌、月刊誌、単行本
テレビ		

目に分類し集計した。

1つの行動が2つ以上の役割を持っている場合は主な1つに限って分類した。また、視覚障害者の行動特性を考慮し、ラジオ・テレビについては他のことをしながらの「ながら」の時間と専ら視聴している時間とを分けて集計した。

その他、次の3つの分類・集計をした。

1) 生活必需... 「すいみん」「食事」「身のまわりの用事」の合計

2) 労働... 「仕事」「家事」「通勤」の合計

3) 余暇... 「個人的つき合い」「くつろぎ・休息」「レジャー活動」「新聞・雑誌・本」「ラジオ」「テレビ」の合計

なお、この調査項目・結果のまとめ方についてはNHKが行なった昭和55年度「国民生活時間調査」に準拠した。

調査結果と考察

今回の調査結果はNHKの昭和55年度「国民生活時間調査」の神奈川県の結果を晴眼者側のデータとして用い、比較して考察した。調査時期の違いや集計・分析の仕方にも違いがあり、精確な比確ではない。

図1は有職者間の時間量を比較したものである。

項目	有職者		新聞		雑誌		ラジオ		テレビ	
	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数
すいみん	8.4	112	8.4	112	1.27	153	1.53	1.27	1.53	1.53
食事	1.12	107	1.12	107	1.07	107	1.07	1.07	1.07	1.07
身のまわり	1.07	110	1.07	110	1.07	110	1.07	1.07	1.07	1.07
仕事	8.4	728	8.4	728	8.4	728	8.4	728	8.4	728
家事	1.12	134	1.12	134	1.12	134	1.12	134	1.12	134
通勤	1.10	110	1.10	110	1.10	110	1.10	110	1.10	110
個人的つき合い	7.33	134	7.33	134	7.33	134	7.33	134	7.33	134
くつろぎ・休息	1.34	110	1.34	110	1.34	110	1.34	110	1.34	110
レジャー活動	1.10	110	1.10	110	1.10	110	1.10	110	1.10	110
新聞・雑誌・本	1.22	153	1.22	153	1.22	153	1.22	153	1.22	153
ラジオ	1.27	153	1.27	153	1.27	153	1.27	153	1.27	153
テレビ	1.53	153	1.53	153	1.53	153	1.53	153	1.53	153

図1 時間量比較(有職者)

有職者(視覚障害者群は勤務者と自宅自営者との合計で25名)間では新聞(日刊誌)の項目で有意差がみられた($P>0.001$)。これは視覚障害者を対象とする、点字・拡大文字・テープ等の日刊誌がでていないことから当然の結果と言えよう。なお、視覚障害者の中に1名だけではあるが新聞を読んでいるものがあつたことは注目してよいだろう。また、意外なことにテレビの視聴時間に関して視覚障害者の方が長かった。その他の各項目に関しては有意差がみられなかった。また、1)生活必需、2)労働、3)余暇の3つの分類でもそれぞれ有意差はみられなかった。この結果からみると有職者の場合には視覚障害者と晴眼者との間に大きな差は無いと言ってよいだろう。

図2は視覚障害者全員と神奈川県民との時間量を比較してみたものである。視覚障害者の方が長い項目はすいみん($P>0.01$) 休養($P>0.02$)、ラジオ($P>0.001$)で、逆に晴

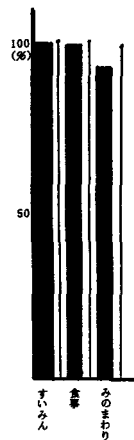
項目	神奈川県民		視覚障害者		有意差	
	時間	人数	時間	人数	項目	P値
すいみん	8.26	1,000	8.26	1,000	なし	
食事	1.00	1,000	1.00	1,000	なし	
身のまわり	1.00	1,000	1.00	1,000	なし	
仕事	8.26	1,000	8.26	1,000	なし	
家事	1.00	1,000	1.00	1,000	なし	
通勤	1.00	1,000	1.00	1,000	なし	
個人的つき合い	7.26	1,000	7.26	1,000	なし	
くつろぎ・休息	1.26	1,000	1.26	1,000	なし	
レジャー活動	1.00	1,000	1.00	1,000	なし	
新聞・雑誌・本	1.22	1,000	1.22	1,000	なし	
ラジオ	1.27	1,000	1.27	1,000	あり	$P>0.001$
テレビ	1.53	1,000	1.53	1,000	なし	

図2 時間量比較(全)

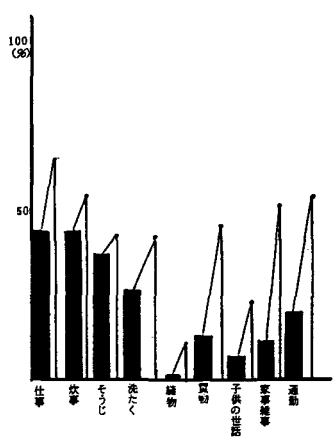
眼者の方が長いのは食事($P>0.001$)、身のまわりの用事($P>0.02$)、家事($P>0.01$)となっている。テレビについては「ながら」(他のことをしながら視聴すること)の場合は晴眼者の方が多くなっている($P>0.05$)が専ら視聴する時間となると視覚障害者の方が長くなっている($P>0.001$)。その他の項目では有意差はみられなかった。この結果で注目すべき点は視覚障害者がラジオ・テレビ、休養についてやす時間が晴眼者に比べて長いことであろう。また、視覚障害者が炊事を行なう場合晴眼者よりも時間がかかる傾向があるにもかかわらず、家事についてやす時間が晴眼者よりも短いということは家庭内での家事分担が少ないことを示しているものと考えられる。

次に、1)生活必需、2)労働、3)余暇の3つの分類の結果をみてみよう。1)生活必需、3)余暇については両者に有意差はみられなかった。2)労働では仕事・家事・通勤の3項目とも晴眼者の平均が高く、有意差がみられた($P>0.001$)。

図3、4、5は行為者率の比較である。



生活必需 図3、行為者率(1)



労働 図4、行為者率(2)

*視覚障害者は棒で、晴眼者は点で表示してある。

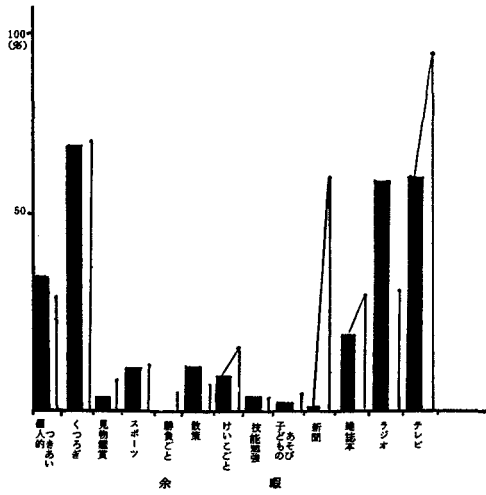


図5. 行為者率(3)

まず図3は1)生活必需の行為者率の比較であるが3項目とも両者に大きな違いはみられない。これはこれらの項目の性質上当然であろう。

図4は2)労働の行為者率の比較であるが仕事・家事・通勤の全ての項目で障害者の方が高くなっている。特に家事の中で縫物・買物・雑事や通勤などで目立っている。これは視覚の障害からくる、細かな物の確認が難しいとか、移動の自由が制限されている等のが原因であろう。また、通勤するものが少ないのは自宅で理療業(あんま・はり・きゅう)を開業するものが多いことも一因となっている。

図5は3)余暇の比較である。ここではその項目によって行為者率に差がでてくる。個人的なつき合いやくつろぎ、スポーツ、技能・資格の勉強では大きな差はみられないがそれ以外のレジャー活動、新聞・雑誌・本、ラジオ、テレビではかなりの違いがみられる。特に目立つのは、視覚障害者では勝負ごとをしているものがないこと、新聞を続んでいるものがほとんどいないことである。新聞については前述したように点字等の日誌が無いので当然である。なお、雑誌・本の中にはかなりの割合でテープ雑誌・テープ図書が含まれている。また、ラジオを聞くものが多いことが目立ち、テレビを見ているものもわりあい多い。

その他の項目では社会的つき合いが無かったことが注目される。個人的なつき合いが多かったことに比べ考えさせられる結果である。病気・静養も多い。学業の中で課外活動が少ないのは対象者が学生とは言っても成人であること、盲学校などで理療の資格を取るために通学していることなどが原因と思われる。

図6に最近1週間の外出回数(通勤・通学を除く)を示した。1回も外出しなかったものと1回だけのものだけで全体の4分の3近くを占めている。

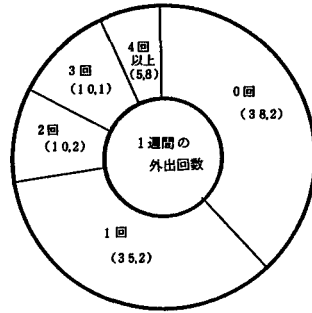


図6

図7に外出の際の方法について示した。

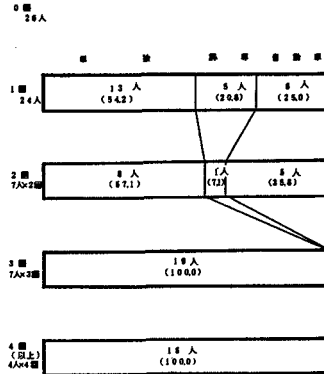


図7. 最近1週間の外出方法

単独で出かける、誘導者がついて出かける、自家用車等で連れていってもらうの3種類に分類した。この図をみると週に3回以上外出したものは単独で出ているが、週に1・2回のものの場合には40%以上に誘導者がついている。当然のことではあるが視覚障害者が頻りに外出するためには単独で歩行できることが前提であることをこの結果は示している。

図8に最近1年間の1泊2日以上の旅行回数を示した。

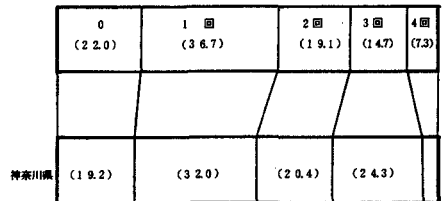


図8 最近1年間の1泊2日以上の旅行回数 (4.1)

調査前の予想に反して回数はかなり多かった。旅行の内容についてはライトホーム入所中に知り合った仲間同士で行ったもの、県立の障害者保養所へのもの、ボランティアグループが毎年主催しているバス旅行などが多かった。

最後に参考のため「時刻別集計結果表」を表2に示しておく。

終りに

この調査を開始する時点では中途視覚障害者の日常生活の特徴として、生活の流れ・パターンがくずれているのではないかと、積極的な行動をなさずに時間を送ることが多いのではないかと、余暇時間の使い方の内容が違うのではないかと、外出や旅行が少ないのではないかなどのが予想された。

実際に調査してみると視覚障害者の各グループごとに大きな差があった。有職者の場合は視覚障害者・晴眼者間に大きな差は無かったが在宅者を含めると差が大きくなる。次に例をあげるように在宅者の中にはかなり極端な生活をしている人がいる。食事につきやす1時間を除けばすいみん13時間余りとくつろぎが10時間弱だけの人、すいみん14時間・テレビ・ラジオが7時間の人、すいみん・ラジオ・くつろぎで22時間以上の人、すいみん・ラジオ・テレビ・点字本で21時間の人等々。全体として、よく眠り・家事は

余り分担せず・外出も少ない。あいている時間のもっぱらラジオ・テレビ・くつろぎ等で過ごしている、このような生活が想像される。調査前の予想に反して旅行回数は多かったが日常的な外出は少なく片やみられた。1泊以上の旅行などの機会は保障されていても日常的外出等については制約が大きいといえる。

この調査で浮かびあがってきた問題のひとつは在宅者の余暇時間の使い方であろう。

現在神奈川県では、県が主催する身障者スポーツ大会として陸上・水泳・盲人卓球などの大会が開かれ、盲人バレーボール大会なども盛んになってきている。しかし、日常的にできるものは仲々無い。また、音楽会などに出かける機会、さらには視覚障害者にもできるゲーム・パズルといったものも非常に少ない。このように視覚障害者の利用できる施設や機会といったものは、はなはだ少ないといえる。このような問題を解決するために視覚障害者に関する施設等は、余暇時間を有効に過ごすための方策を考える必要があるだろう。

今回の調査の結果をもとにしてさらに視覚障害者全体の生活実態を明らかにし、その生活を充実させる方向を考えていきたい。